

東日本大震災における「津波による犠牲者ゼロ」の 地域を対象にした探索的調査

An Exploratory Survey on Affected Areas with “No-Victim” in the Case of
the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami Disaster

○佐藤 翔輔¹, 今村 文彦¹
Shosuke SATO¹ and Fumihiko IMAMURA¹

¹ 東北大学 災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

It is important to prevent damage and to reduce disaster victim caused by tsunami. There are some area where no casualties were reported in the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami Disaster in spite of a huge hazard impact. In this paper, we have conducted the field and material survey to look for the reason why no some was killed by the disaster in thesesaffected area.

Keywords : disaster victim, tsunami damage mitigation, disaster culture, disaster tradition, disaster memorial

1. はじめに

東日本大震災の発生や南海トラフ地震津波等の切迫性を受けて、我が国では津波に対する様々な防災・減災対策が講じられている。これらの対策の至上目標は、津波による人的被害の発生を可能な限り抑制・軽減することにある。東日本大震災において甚大な被害を受けた気仙沼市の震災復興計画では、「津波死ゼロのまちづくり」が目標の一つとされ、昼間・夜間人口を考慮した津波避難の基盤整備や地域ルールづくりが行われてきている¹⁾。

本研究の問題意識は「津波による犠牲者はゼロにすることができるのか」にある。東日本大震災の被災地では、大規模な津波が実際に発生したにも関わらず、犠牲者が発生しなかった地域がある。本稿では、津波による犠牲者がゼロだった地域にはどのような特徴があるのかをリサーチクエスションとし、岩手県内における探索的な調査を行い、その経過を報告する。

2. 研究方法

本研究は、フィールド調査とそれを補完する資料調査によって行う。フィールド調査は、2017年5月執筆時点で、岩手県の1) 洋野町八木地区、2) 普代村太田名部地区、3) 大船渡市三陸町吉浜地区、といった3つの地区を対象にしている。1) 2) は東日本大震災において犠牲者が発生しなかった地区である。3) は1名の行方不明者が発生しているものの、大津波の発生にも関わらず被害が極めて少ないことから、調査・考察の対象とした。洋野町八木地区は2016年3月7日、9月24日、2017年3月5日、普代村太田名部地区は2016年3月3日、9月25日、大船渡市三陸町吉浜地区は2017年2月20日にフィールド調査を実施している。うち、八木地区と太田名部地区の3月の調査は、すべて三陸地震記念日慰霊祭での参加観察である²⁾。それ以外の日程では、地元役所・役場職員をインフォーマントとする地元住民への簡易的な聞き取り調査を行い、関連するデータを収集した。

以降では、3地区のそれぞれについて考察していく。

3. 洋野町八木地区

洋野町八木地区は、1933年昭和三陸地震津波によって79名が犠牲者となった地域³⁾である。東日本大震災発生直前は約260世帯だった。八木地区において、東日本大震災の犠牲者がゼロとなった要因としては、1) 海岸のすぐ近くに広がる丘地、2) 住民による毎年の避難訓練と避難路の清掃、3) 津波碑の前で行われる慰霊祭があると考えられる。

- 1) 海岸のすぐ近くに広がる丘地：八木地区は、海岸のすぐ側から比較的急な傾斜をしており、その先に広い丘がある地形となっている。短い時間で安全な場所に津波避難できる地形であったことが、犠牲者がゼロとなった要因の一つと考えられる。なお、洋野町においては八木地区のみ、東日本大震災の直前に防潮堤は存在しなかったことも着目すべき点である。
- 2) 住民による毎年の避難訓練・研修と避難路の清掃⁴⁾：洋野町では、過去に多くの津波犠牲者が発生したことを受けて、町全体として昭和三陸地震津波が起きた3月3日に毎年訓練が行われていた。その後、年々参加者が減少することを受けて、2006年から訓練を日曜日の日中に変更し、2007年から消防団員の退避行動、2008年に低地の道路閉鎖を訓練内容に加えた。八木地区において2008年8月に設立された八木北地区自主防災組織（八木北部落会）においては、津波避難訓練のほか、避難路や避難場所の除草・清掃、看板設置などの整備も併せて行ってきた（写真1）。これは、住民が津波避難の経路を体に染み込ませる機能があったという。さらに、過去の津波を経験した住民の話聞く機会も設けられたという。
- 3) 津波碑の前で行われる慰霊祭²⁾：八木北地区と八木南地区の合同で、毎年3月3日周辺の日曜日の朝に三陸地震津波記念日慰霊祭が行われている（写真2）。住民主導で行われているにも関わらず、町長・副町長ほか町役場職員も参加する。これも、前記2) 同様に、参加者の減少を受けての2008年から行われた変更である。三陸地震津波が起きたことを地域で忘れ

ないため、さらには「地震＝津波」という認識をもつ機能を有していたと考えられる。



写真1 八木地区で行われていた訓練の様子
(八木北地区 2009年8月23日 蔵嘉浩氏提供)



写真2 八木地区における慰霊祭
(2016年3月7日 著者撮影)

4. 普代村太田名部地区

普代村太田名部地区は、1896年明治三陸地震津波では196名(当時の人口267名)、1933年昭和三陸地震津波では99名が犠牲者となった⁴⁾。太田名部地区で東日本大震災の犠牲者がゼロとなった要因には、1) 太田名部防潮堤、2) 2011年3月9日の地震とその対応、3) 津波碑の前で行われる慰霊祭があると考えられる。

1) 太田名部防潮堤: 太田名部地区にある太田名部防潮堤は、高さ15.5m、延長155mであり(写真3)、東日本大震災における津波高さは、これを下回り、同地区では住宅被害も発生しなかった。また、津波警報が発表される度に、防潮堤の水門がすぐに閉鎖されることから、「早く行かないと(出ないと)閉じ込めれる。」という認識が住民にあったという。



写真3 太田名部防潮堤 (2016年9月25日 著者撮影)

2) 2011年3月9日の地震とその対応: 同日11:45頃、三陸沖を震源とするM7.2、最大震度5弱の地震が発生した。当時、太田名部地区では漁業者が沖合に出ているにもかかわらず、同地震の情報を把握することができなかったという。これを受けて、地震・津波を警戒するために、3月10日から漁業を自粛していたことから、3月11日地震発生時は漁に出ている、港で作業している住民はほとんどいなかったという。

3) 津波碑の前で行われる慰霊祭²⁾: 太田名部地区でも村が主催する三陸地震津波記念日慰霊祭が行われている(写真4)。昭和三陸地震が発生した毎年3月3日の朝に慰霊祭が行われている。津波碑の周辺の清掃は住民が自主的に行っていたり、慰霊祭に直接参加せずとも同時刻に家々で黙祷する習慣がある。

5. 大船渡市三陸町吉浜

洋野町八木地区は、明治三陸地震津波で推定200名以上、昭和三陸地震津波で17名が犠牲者となった地域である。吉浜地区において、東日本大震災の犠牲者が極めて少なき要因には、高台移転事業のみが考えられる。吉浜地区(旧吉濱村本郷)では、明治三陸地震の被害を受けて、新沼武右衛門初代村長の主導で被災者自身が土地を見つけたり、費用を賄う「自力移転」が行われた。その後、昭和三陸地震津波による被害を受けて、行政による高台移転地「復興地」が造成された。今回浸水した地帯は水田であり、過去に浸水被害が集中した場所である。

吉浜地区の高台移転の特徴は、第1段階として住民の私財によって行ったということ以外に、「住まいが徐々に低地に戻る」という現象が起きなかったことにある。「低地では農業、漁業を営み、住居は津波が来ない場所に」という考え方が一貫しているという。「津波は恐ろしいものと言いつ聞かせられていて、高台と低地への行き来を不便だと思ったことはない」という。

吉浜地区において、さらに特筆すべきは地域に存在する津波碑が以前の工事によって埋没し、忘れられていたことにある。東日本大震災によってその一部が露出し、改めて保存する活動が始まったほどである。



写真4 太田名部地区における慰霊祭
(2016年3月3日 著者撮影)

6. おわりに

地域の被害抑止力が今回の津波ハザードを上回っていたことがあるにしても(太田名部、吉浜)、いずれの地域でも、訓練(八木)、慰霊祭(八木、太田名部)、日常生活文化(吉浜)などの何らかのかたちで、過去の津波災害の伝承が引き継がれていることが共通点として挙げられた。

謝辞

本研究は日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的とした拠点構築手法のモデル化と実践的研究6(研究代表者:佐藤翔輔)の助成を受けた。

参考文献

- 1) 気仙沼市: 気仙沼市震災復興計画, 2011.10.
- 2) 平川雄太, 佐藤翔輔, 川島秀一, 今村文彦: 津波碑前で行われる慰霊祭の実態調査とその効果に関する研究, 地域安全学会梗概集, No. 39, pp.125-128, 2016.11.
- 3) 洋野町: 四季彩【23】3月3日の出来事, 広報ひろの, 平成21年3月号, 2009.3.
- 4) 河北新報: 犠牲者ゼロ 「まず逃げて」訓練奏功, 2011.11.24
- 5) 普代村: 教訓を後世に 津波はいつかまた来る, 東日本大震災記録誌, pp.99-100, 2017.3.
- 6) 岩手日報: 大船渡・吉浜 命守った先人の教訓, 2011.12.1
- 7) 毎日新聞: 〈昭和三陸地震〉津波の教訓刻む巨岩・・・「東日本」で再び露出, 2017.1.6